

The Futaka Spirit

(現教だより第11号)

い組 縦割り創造活動

活動名「合宿でもっと仲良し『い組』になろう！」

支援者 前場 裕平 先生

学年を超えて互いに本音で語り合える、柔らかな学級風土が出来上がっていました。低学年の子どもの素朴なつぶやきに上級生が感受し、共感していく姿が印象的でした。これからの一年間が楽しみです。

【子どもの活動】

1 合宿に向けて楽しみなことを互いに話し合う。



柔らかい雰囲気の中で笑顔がこぼれる

2 「い組」のめあてに近付くために気を付けることを話し合う。



多様な話題の広がり 問題意識は・・・？

3 卒業生からのメッセージを見る。



なりたい集団の姿からめあてを立てる



卒業生の言葉に高学年は感受していく

4 合宿で不安なことを話し合う。



下級生の不安に上級生が共感

5 本時のまとめをする。



合宿へと気持ちを高める (文責 橘 慎二郎)

【前場先生コメント】

様々な視点からのご意見ありがとうございました。本時では相手の思いに寄り添うという眼鏡をつくることで、自分にとって意味のある価値につながるという仮説で実践を行いました。合宿でのふり返りでは、「1～5年生(特に5年生)が私たちを助けてくれた」と書いた6年生、「〇〇さんの得意なところを見付けられた」と書いた3年生の姿が見られました。今回は学校行事をもとに単元化を組みましたが、夜の会で多くの先生方のお話を聞き、プロジェクトを核として単元化するという方向性の方が良いかなと自分自身は感じました。

前場実践【い組 縦割り創造活動】

～ 合宿でもっと仲良し「い組」になろう ～



本実践の主張点

自分や集団にとって意味のある価値を創造する見方・考え方を育むために

- I 合宿活動を単元化し、育まれる価値を想定して授業づくりを行う。
- II 感受—想像—意味付けしていく姿をエピソード記録として残し、評価や支援に生かす。

常時活動・行事活動・プロジェクトを一体的に捉えた年間活動計画

前場先生からは、プロジェクトでの問題解決を一年間という長いスパンでのみ捉えるのではなく、常時活動や行事活動とも関連を図りながら、単元として捉えていくことが提案された。ここでは合宿の内容を計画・運営・評価する一連の過程を単元として捉え、合宿ならではの不安や悩みを解決していくとする過程の中で、自分や集団にとって意味のある価値を創造するための見方・考え方を育もうとした。本単元で教師が想定した価値は以下の通りである。

【学び続ける力】(夢や憧れをもち、自律的に学び続ける力)
プロジェクトに集中的に取り組む中で異学年、男女、地域の人など多様な人たちと関わり、進んで活動をしている。

【関わる力】(「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に関わる力)
異学年の立場や思いに寄り添い、認め合う中で、相手の思いを察した言動をとっている。

【創造する力】(問題を解決し、知や価値を創造する力)
子どもが内容を計画・運営・評価する中で、様々な意見を受け入れながらよりよい活動にしていこうとしている。

上記の価値を創造するためのしかけとして、「なりたい自分と集団の姿を子どもとともにつくる」「昨年度の合宿の感想をもとに、異学年の思いを共有する時間を取る」等が示された。非日常の合宿という場だからこそ育まれる価値がある、という主張である。ただ、上に示されたような価値(特に学び続ける力、関わる力について)は単に本単元のみで創造されるものであるかどうかは疑問が残るところである。なりたい自分や集団の姿へのアプローチは、子どもたちが年間を通してイメージしていく、いわゆる創造活動の目的に当たる所であり、年間を通して繰り返し触れる所である。そのような考えると、本単元のような合宿を単元化することのよさは、特定の価値の創造ではなく、子どもの記憶に残りやすい非日常の場面での問題解決を通して、個や集団にとって意味の深い、汎用的な価値が生まれやすい状況をつくることともいえるのではないだろうか。

実際、合宿での子どもたちの様子を見てみると、前場提案のねらい通り、異学年の子ども同士が互いに寄り添い、進んで活動をする姿が見て取れた。このことから、縦割り創造活動における単元化は有効であるといえる。創造活動の単元化についてはまだまだ議論の余地がある。今回のように行事の一部を切り取るのか、または常時活動やプロジェクト活動とも関連されながら時期で切るのか、また、「気づき」「問い・願い」「試行錯誤」「夢や憧れ」といった、問題解決の場面で切るのか、切り口はいろいろ考えられる。今後の実践を通して明らかにしたい。

エピソード記録の集め方とその活用について

前場実践では、一人一人のエピソード記録が行事や時期ごとにきちんと集められ、整理されていた。教師が明確な意図をもったしかけを行い、価値が創造される可能性のある場面を見極めていなければならぬ。一人一人のエピソードを集めることはできない。本時は、教師が個々の思いや願い、悩みを受け止める。教師が一人一人の場面をうまく見ていくことで、縦割りの創造活動においても、やがて場面の設定、環境づくりといった価値の創造につながる場面を追っていくことが可能になる。今回は、子どもたちのノートに、30人分の問題解決の場面を追っていき、観察し、記録し、共有し、振り返り、評価など、継続可能な記録の取り方についても考えていきたい。

成果と課題

- 創造活動領域の全体像を見通した年間活動計画を作成しておくことで、育みたい価値につながるしかけを長期的なスパンで見通しながら行っていくことが明らかにになった。
- 「気づき、願い」の段階で、教師と子どもが本音で語り合える支持的風土が形成されていたことで、自分とは異なる学年の考え方も素直に聞き入れ、共感しようとする姿につながった。
- △ 準備が周到であるほど、教師はしかけを見せなくなるが、教師が出過ぎると子どもは前に出なくなる。子どもに委ねる場面と教師の意図性を発揮する場面とのさび分けを図りたい。
- △ 本校のカリキュラムのよさを参会者に伝えるためには、研究会に向けて、45分という一単位時間の中で、何をどう見せていくか考えていく必要がある。本時は価値の創造につながる話し合いだったのが、話し合いを中心にするのか、活動場面を見せるのか等、育みたい価値に合わせて見せ方を工夫していく必要がある。